どうしたら日本人の独創力を強化できるか？

川上 正光*

およそ一家が興り、一国が興るのは、その活力と独創力によることは古今東西の歴史が示している。ところで、現在日本の繁栄は根なし草の花が咲いたようなもので、いつ枯れるかわからない。今のうちに自分の力で大地にしっかり根を着けなければならない。しっかり根を着けるということは独創力を強化することにはかならない。これは大変困難なことであるが、これこそ国家百年の大計の根本であると思う。“点滴巖も穿つ”のたとえに力を得ていささか愚見を述べてみたい。

I 国の指導者が真に独創力の必要性を認めること

このためにはいかにわが国の独創力が貧弱であるかを知るべきである。これを例示すると次のとおりである。

(i) 世界の研究成果の最高水準を示す Nobel 賞がさっぱり獲れない。これに関する思い出を述べておこう。

昭和 37 年、筆者は在外研究員としてアメリカに行き、いくつかの大学を訪問した。まず、Stanford 大学に行き工学部長に面会すると、彼は開口一番“わが大学には Nobel 賞受賞者が 6 人いる”というのである、続いて California 大学 (Berkeley Campus) も同様に 13 人、Columbia 大学でも (出入りを含めて) 18 人と型で押したように Nobel 賞受賞者の話から始まるのである。このようにアメリカの大学の目標の高いことは、わが国の大学と比べて正に雲泥の差があることに驚いたのであった。

(ii) 技術貿易も振るわない。アメリカは約 10:1、イギリスとフランスは約 1:1 であるのに対して日本とドイツは約 0.38:1 という低値である。資源の乏しいわが国こそこの soft wear の生産に力を入れるべきである。

(iii) OECD は昭和 51 年にわが国を調査し、“日本

の社会科学は知識借用型で、抽象的概念操作を経験的事例研究よりも重視し、創造的な貢献に乏しい”としている。この結論は単に社会科学だけでなく、わが国学術の全分野に言いえることではなからうか。

(iv) その他、わが国の内政、外交などについても、独創性は極めて乏しいと考えるのは筆者だけであらうか。

II 独創力養成には教育は全く有害であること

いま述べたようにわが国の独創力が貧弱である原因は多々あろうが、ただ一つはっきりしていることは“幼稚園から大学院まで Teaching (教育) ばかりで、ほとんど Education (啓発教育→啓育) がなされていない”ことである。換言すれば、わが国の学校では始めから終りまで“物知り人間”を作ることに専念し、新規なことを考え出す“独創人間”の養成に努力を払っていないのである。こうなった最大の原因は Education (才能を引き出すこと) を教育と誤訳したことにあると信ずる。つまり諸外国の学校では Education を行なっているのにわが国では Teaching ばかりしか行なわず、物知りを優等生としているのが根本的に間違っているのである。早く“考え出す人間”を作るよう切替えるべきである。

III 外発研究体制から内発研究体制に切換えること

わが国の研究の大部分は外国に誘発されて行っており、外発の傾向が著しい。日本で何が必要か、国内の必要に応ずる内発研究をもっと重視すべきであらう。われわれは、早く外国人の頭で考えることをやめて、自分の頭で考えようではないか。

なお、研究の実績をあげるためには、研究費の与え方をきびしく実績主義によることとしたり、その他予算制度の改革や寄付研究費の免税措置など諸外国の長所を取り入れるべきことが残されていると思う。

* Masamitsu Kawakami 長岡技術科学大学 (949-54 長岡市上富岡町字長峰 1603) 学長・工博

<略歴> 昭和 10 東京工業大学電気工学科卒業。同年東芝(株)入社、23 年東京工大助教授、教授を経て、47 年退官、同年横浜国大教授、48 年東京工科大学長、52 年任期満了。同年より現職。